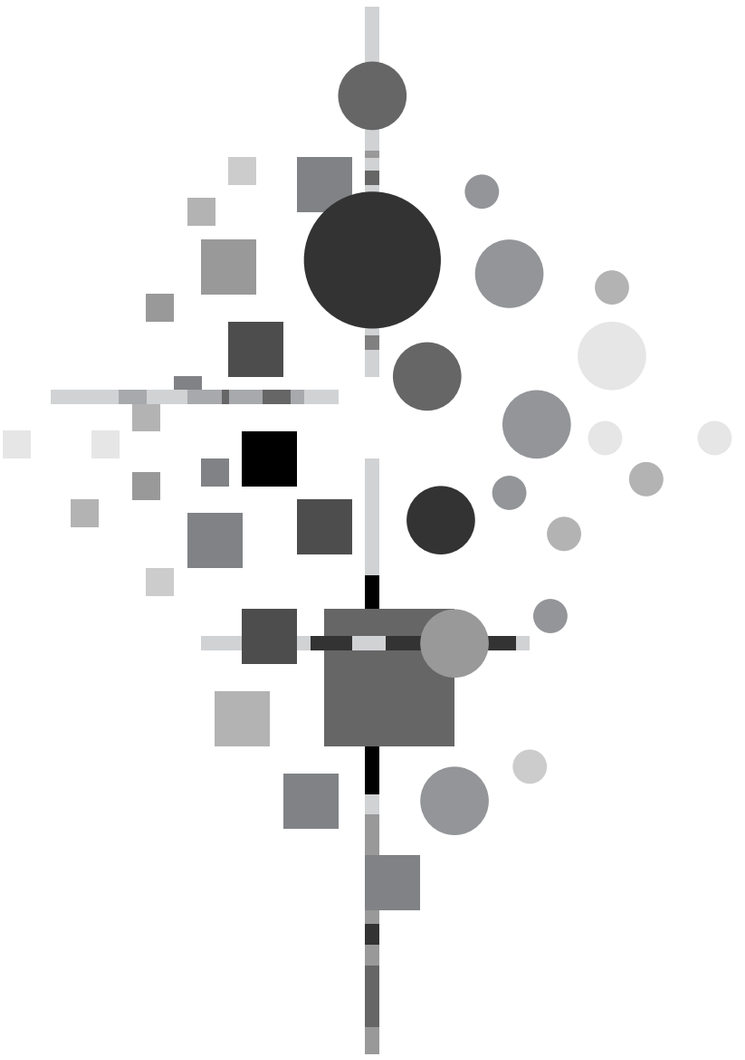
高岡特産産業のうごき 平成18年度版



- 銅・鉄器
- 漆器
- アルミニウム
- 仏壇

高岡市産業振興部工業振興課

高岡の特産産業

高岡の特産産業の起こりは、今から約 400 年前、加賀藩二代藩主、前田利長公が高岡に入城し、鋳物工場の開設、綿取引所の許可など、新しいまちづくりのための産業振興に力を注ぎ、保護育成を図ったことに始まる。このように古くから育まれた高岡の産業は、その後、全国に誇りうる地場産業として目ざましい成長を遂げ、そこから発展した伝統的技法等は、発展する商工都市高岡の原動力となっている。

目　　次

高岡の銅・鉄器…… 1
高岡の漆器…… 9
高岡のアルミニウム……14
高岡の仏壇……18

調査要領

○この調査は、業界振興の基礎資料とするために、高岡の地場産業の生産、出荷、販売動向等を、全事業所を対象に実施した。
○調査の方法は、アンケート調査による。平成 16 年度より隔年調査とした。
○調査対象期間は、各企業における、平成 18 年度決算期間である。

高 岡 の 銅 ・鉄 器

【産地の特色】

高岡銅器は、慶長16年（1611年）に加賀藩二代藩主前田利長公が高岡のまちの産業振興策のひとつとして、現在の高岡市金屋町に鋳物工場を開設したことに始まる。当時は鍋・釜・農機具などの鉄鋳物が主体であったが、幕末から銅器美術工芸品へと発展し、**明治時代にパリ万国博覧会に展示されるなど、世界的に知られることとなった。戦時中、軍事使用のため金属が手に入らず、壊滅的な打撃をうけるものの、**戦後、先人たちの努力により、急速に復興し、さらに新製法の導入により大量生産体制が確立され、昭和50年2月には伝統的工芸品として国の第一次産地指定を受けている。

産地の特徴として、製造・加工部門では工程別の分業体制が確立されており、事業所規模は小さく、職人集団的色彩が強いことや、集積度合いが全国の産地に比べ、かなり高いことなどが挙げられる。また、製造業者は作ることに専念し、新商品開発や販売機能はほとんど産地問屋が担うという分業体制が採られてきた。

しかし、近年、産地問屋からの発注が減少したこともあり、独自に販路開拓を行う製造業者が増えてきており、銅器産業の構造に変化が見受けられる。

【銅・鉄器の動向】

平成18年度の銅器販売額は、約136億円で対16年度比13.4%減、鉄器は、約4億円で対16年度比30.8%減と、それぞれ大きく減少している。顧客ニーズの変化に起因するガラス・陶器といった他素材商品へのシフト、贈答品や記念品の激減や低価格商品へのシフトに加え、技術・品質の向上した中国等外国製品の輸入などの影響がさらに大きくなっていると思われる。また、従事者の減少と高齢化が一層進み、廃業する事業者が増えてくるなど、かなり深刻な問題となっている。

一方では、企業間でも業況に格差が出始めているほか、製造業において、一般機械部品製造等、他分野への業種転換を行う企業がさらに増加している。

このような中、業界では、「職人」と「問屋」が協同で新商品開発を行ったり、富山大学と連携して仏具を開発したりするなど、新しい動きが見られ、今後の活動が注目される。

また、国において、地域の「強み」である産地の技術等（地域資源）を活用して新商品・新サービスの開発・市場化に取り組む中小企業に対し、商品開発等補助金、設備投資減税、低利融資、専門家派遣など、総合的に支援する「中小企業地域資源活用プログラム」を創設されたが、高岡銅器の製造技術が「地域資源」として認定された。この制度を積極的に活用し、新商品開発、販路開拓を行う企業が増え、産地が活性化することが大いに期待される。

高　岡　の　漆　器

【産地の特色】

高岡漆器は、加賀藩二代藩主前田利長公の産業振興策のひとつとして始まる。当初は、箪笥、長持、針箱、膳などの生活用品や家具が主であった。その後明和年間（1764～1772）に中国風の様式が取り入れられ、明治初期までに現在の高岡漆器の特徴である「彫刻塗」「勇助塗」「青貝塗」の3技法が確立され、産地の名声を内外に高めることとなった。これらの技は、歴代の名工によって伝えられ、多くの名作が作られるとともに、国の重要有形無形民俗文化財の高岡御車山に凝縮されており、高岡の文化として今日に継承されている。昭和50年9月には伝統的工芸品として国の産地指定を受けている。

高岡銅器同様、工程別の分業体制が確立されており、事業所規模は小さく、職人集団的色彩が強いことも大きな特徴である。

【漆器の動向】

平成18年度の高岡漆器の販売額は、約8億6千万円で、対16年度比14.1％減と大きく減少している。これは、高岡銅器と同様、消費指向の変化等により、贈答品、記念品の需要が低位で推移していること、技術・品質の向上した中国製品等外国産商品の輸入などが影響していると思われる。また、製造・加工業者の後継者確保が最大の課題となっている。

業界では、体験工房の開催や、銅器業界と連携し、児童を対象とした親子のものづくり体験事業の実施など、地元住民や児童・生徒へも高岡漆器に対する理解が深まるよう努めている。銅器製作に比べ、危険性が少ないため、女性や子供が手軽に体験しやすく、高岡地域地場産業センターで行っている「高岡ものづくり体験教室」においても、漆器体験のメニューが新たに加わった。

また、国の「中小企業地域資源活用プログラム」において、高岡銅器の製造技術とともに、高岡漆器の製造技術も「地域資源」として認定された。この制度を積極的に活用し、新商品開発、販路開拓を行う企業が増え、産地が活性化することが大いに期待される。

近年、海外において日本文化が「ジャパン・クール」として見直され、一種のブームとなっているが、漆は英語で「ジャパン」と訳されるなど、和のテイストの代表的なもののひとつであり、また、現代人に求められている「癒し・和み」を感じさせる商品として高い可能性を秘めている。今後、消費者ニーズに応えられる商品開発が大いに期待される。

また、高岡は、2009年に開町400年を迎えるが、高岡銅器同様、高岡漆器は高岡の歴史とともに歩んできた代表的な産業であり、この400年を契機に、業界が活性化されることが期待される。

高岡のアルミニウム

【産地の特色】

高岡のアルミニウム産業は、本市の伝統産業である銅・鉄器の鋳物技術をもとに、昭和初期に鍋・釜などの日用品を製造し、近県及び中京方面に出荷したのが始まりである。戦後の経済復興と日本経済の成長からアルミ需要が拡大し、本市では豊富で低廉な電力と水を背景に、アルミ業界は急成長を遂げた。現在、住宅用・ビル用建材を中心に、エクステリア製品、家庭用厨房品、機械車両部品などを生産している。アルミ建材分野においては、本市の中核的産業をなすだけではなく、全国 3割のシェアを占めており、北陸におけるリーディング産業の地位を確立している。

近年は、消費者意識の変化により、大量生産・大型消費の時代から少量多品種生産の時代へと移行しており、それに対応できる生産体制づくりに取り組んでいる。

【アルミの動向】

平成 18 年度のアルミニウム製品の出荷額は、約 4, 081 億 7千万円で、対 16 年度比 6.3%の増となっている。内訳としては、住宅用建材が約 1,534 億 4千万円で対 16 年度比 11.7％の増、ビル用建材が約 824 億 2千万円で 30.9%の減、その他（機械部品、工芸品等）が 1,023 億 3千万円で 64.8％の増、エクステリアが 661 億 5千万円で 9.6%の増となっている。

本市で大きなウェイトを占める建材分野においては、ビル着工が減少していることによるビル用建材の大幅な減など、苦戦している企業が多い。

また、平成 19 年 6 月に建築基準法が改正され、建築確認申請の手続きが厳格化されたが、その結果、住宅投資（マンション等含む）、建設投資（オフィスビル等）の大幅減少が続いている。この影響が建材分野にも大きく影響しており、早急な対策が望まれる。

一方、非建材分野は、自動車部品をはじめ機械部品、素材関連で生産設備のフル稼働が続くなど、好調であり、大きく伸びている。中には、新たに設備を増設する企業も出てきている。しかしながら、中国等の建設ラッシュなどにより、地金高騰が続き、その上昇分を価格に転嫁できず、「売上高は増加しているが、利益は減少している」という企業がさらに増加している。また、原油高の高騰による生産・輸送コストの上昇など、予断を許さない状況が続くことが予想される。

業界では、顧客ニーズに合わせたデザイン、機能など、高付加価値商品の開発に取り組む一方、商品だけでなく、生活様式自体を顧客に提案する「提案型販売」の動きが活発になってきた。また、富山大学と連携してアルミ構造の「待合所」を共同開発するなど、新たな取り組みがされてきている。

さらに、最近注目を集めているマグネシウム合金において、新技術開発により圧延板材の量産化が可能となり、今後、新たな事業展開へつながることが期待される。

高　岡　の　仏　壇

【産地の特色】

高岡の仏壇は、慶長年間に指物師大場庄左衛門が高岡に移り住んで家具を作り、漆塗装を行ったとする記録があることから、このころが高岡での仏壇製造の始まりとされている。その後、天保年間に仏壇塗師高森重次郎の活躍などにより、少なくとも 150 年前には現在の高岡仏壇の基盤ができあがったものと考えられている。

当産地は、真宗王国という風土のもとで、藩政時代から今日まで、規模は大きくないものの、堅実な産業として地歩を固めてきた。

高岡仏壇は、材料にくさまき・いちょう材を使用している。これは、全国でも高岡だけが使用しており、永年の耐久力は最も優れていると云われている。また、高岡銅器の彫金の伝統を受け継いで冴えた技法を展開し、独自の工法による耐久力に優れた表金具の使用箇所が多いことも特長である。さらに、彫刻の使用部分が多く、金箔が仏壇内部に箔押されて、荘厳かつ美装華やかである。高岡仏壇は、古来の技術を継承し、あくまでも漆塗りを堅持しており、合成樹脂塗料は一切使用されていない。まさしく、高岡の伝統技術の粋を集めているといえる。

【仏壇の動向】

平成 18 年度の仏壇販売額は、約 11 億 1千万円で、対 16 年度比は、9.9％減となっている。消費者の仏壇に対する意識の変化、住宅事情や生活様式の変化から、仏間のない住宅の増加や、海外での製造による低価格化、仏壇の小型化に加え、消費者が求める価格帯そのものが低下していることなどが挙げられる。コスト削減や積極的な店舗展開等の販売戦略により業績を維持している企業もあるが、苦戦している企業が多い。

業界では、現代の生活空間にマッチした家具調仏壇や小型仏壇、更には携帯仏壇などの新商品開発を行う事業者も出てきている。

また、近年では、仏壇の修理が増えてきているが、長年使用された仏壇の修理・再生には、高度な技術が必要とされており、その伝統技術の継承が課題となっている。

高岡特産産業のうごき

平成 19 年 12 月　発行

高岡市産業振興部　工業振興課

高岡市広小路 7 番 50 号　TEL0766-20-1285